

氏名	梅崎 瞳
学位の種類	博士（芸術）
学位記番号	甲博制第 44 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 22 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当（課程博士）
学位論文題目	巨大一枚型による型染め表現の可能性
作品テーマ	巨大一枚型の型染めによる六鯨
論文題目	型染めの芸術表現上の今日的可能性
論文審査委員	主査 客員教授 福本 繁樹 副査 教授 瀧本 雅志 副査 教授 小野山 和代

内容要旨

梅崎瞳の学位（博士）論文「巨大一枚型による型染め表現の可能性」は、作品テーマを「巨大一枚型の型染めによる六鯨」とし、論文題目を「型染めの芸術表現上の今日的可能性」としたものである。

作品は「鯨者六鯨ト申候」を共通タイトルとする、《座頭鯨》《背美鯨》《兒鯨》《抹香鯨》《長須鯨》《鰯鯨》の 6 点で、それぞれの大きさは、日本で入手できる最大幅の木綿地の幅約 2.3 メートルを共通の縦寸法として、横寸法は、約 10、9.6、10.7、13.6、13.6、13 メートル、総計約 70.5 メートルという超大形の組作品である。六鯨それぞれの性格や生態、棲息の場にあわせて、巨鯨・大海・鯨波と、怒濤に翻弄されて逃げまどうかような魚群や鳥、マンボウ・ウミガメ・タコ・イカ・サメ・コバンザメ・エイ・クラゲなどの海の生物をモチーフとし、黒色一版の型染めに、アドリブによる鮮やかなむ

ら染めを重ねて、巨大画面をも狭しと思わせる迫力で描いた。

暖流と寒流が交差する日本の近海では、30を超えるクジラの種が確認されている。なかでも「六鯨」が古来その代表とされてきた。2009年開催の企画展「熊野灘のクジラ絵図」の図録『鯨者六鯨ト申候』には、6種の鯨がいきいきと描かれた絵巻が紹介されている。その絵図をみたことが、「六鯨」を博士作品のモチーフとするきっかけになったという。鯨に関する絵巻、写真集、映像、博物館展示などを参考に、詩歌、映画、物語などに描かれたイメージや、科学的な研究資料の解説をふまえつつ、独自のイメージをふくらませ、大画面に躍動する「六鯨」を構成した。

論文では、特殊な発達をとげた日本の型染めが近代世界のデザインや美術に多大な影響をあたえてきたことをまず解説し、また近年においても日本の型紙への世界的な関心が高まり、日本ならではの「型紙」の造形的意義を再考する必要性が訴えられていることを指摘している。論文は3章で構成され、第1章では、ひろく世界や歴史における「型」による造形に目を向けて、さまざまな型使用の形態や意義を類型的にとらえ直して分析した。第2章では、近・現代における作家の仕事から、芸術表現における型使用の形態や意義を考察し、型染めの新しい造形分野がいかに展開してきたかを明らかにし、それらをふまえたうえで、第3章で自身の制作の独自性と意義について解説を試みるとともに「型染めの芸術表現上の今日的可能性」を論述している。

「巨大一枚型による型染め表現」を方法としてきた作者は、まず自身の特異な手法の意義を問うことからはじめなければならなかった。古来世界の型染めは、小さな型を繰り返すことによって、複数生産における型の利便性を活用してきたのが一般的だが、それに反して作者は作品制作に、巨大な画面を一枚で構成する型紙を使い、画面で型のパターンを繰り返さない方法を用いてきた。そのような世界の歴史において例外的だといえる自身の方法に、はたして妥当性があるのかという問いを設定し、型使用の意義について歴史的に再検討することから論考を展開している。また、近・現代の創作的な型染めには、日本独自に発達した型染めの伝統を如何に今日的な創作に活用するかによって、さまざまな傾向のちがいや類型化が生じていることに着目し、その諸傾向を分析

し、自身の制作の意義や座標軸を解説する有効な手立てとしている。

なお各章の項目の構成は、第1章の「型の使用分析」が、1. 型の始源的役割、2. 陰陽二段階のシンプルなデザイン、3. 連続模様による表現、4. 細密文様の開発、5. 複数生産のための分業と産業化、6. 防染のための利用、7. 捺染のための利用、第2章の「近・現代型染め作家たちの作品の特性」が、1. 芹沢銈介と紅型、2. 柚木沙弥郎と女子美術大学、国展、3. 稲垣稔次郎と京都市立美術大学、4. 伊砂利彦と新匠会、沖縄県立芸術大学、5. 小合友之助、西嶋武司と日展、第3章の「博士作品について」が、1. 巨大な一枚型による型染めと黒の表現、2. 作品「鯨シリーズ」、3. 水紋・波紋、4. 制作工程などとなっている。

審査結果の報告

博士作品は6点組、延長約70.5メートルの規格外の大きさの作品である。作品が展示された会場に一步足を踏み入れると、観者はまず壁面をうめつくす作品の迫りに圧倒されるだろう。そして作品にうずまき、うちかえし、うねる鯨波のなかにつつまこまれ、そこに躍動する鯨の物語をつぎつぎと見だし、小魚とともに泳ぎながら、「六鯨」それぞれに描き分けられた世界にひきこまれ、ひととき海中をただよう人となるだろう。

作品は、日本近海を回遊する代表的な6種のクジラを大型版による型染め技法で描いたものである。海面から勢いよくジャンプをさせた長い胸びれの《座頭鯨》、捕鯨船から逃れようと、大きく豪快に口をあげ水面で跳ね水しぶきを上げる《背美鯨》、小魚がひしめく大群とともに泳ぐ細長い巨体の《長須鯨》、水ごとすべてを呑みこむように大きく口を広げる《鰯鯨》、身体全面に付着するフジツボなどを赤い花のように描いた《兒鯨》、深海で穏やかに泳ぐ、頭の大きな《抹香鯨》など、それぞれの巨体が画面をはみだし、飛び出すかのようにいきいきと描かれている。

6点の作品それぞれには、モチーフとする鯨の名前が「座頭鯨・背美鯨・長須鯨・鰯鯨・兒鯨・抹香鯨」と大きく枠入りで書きこまれ、観者へのアピールや装飾効果になっ

ている。この文字は、歌舞伎、相撲、寄席などの幟や看板、番付などに使われる江戸文字を参考にしたもので、この種の文字は遠目にもいいように太く大きめに、また一見判読しづらいほど詰めて書かれ、それを読むのが「通」であるかのように「遊び心」を刺激してきた。一方、作品には作者のサインの文字がない。そのかわり《背美鯨》には、クジラを追う二艘の捕鯨船の装飾紋様に梅の花が配されている。その装飾が「梅・崎・瞳」というサインともなっているという。サイン（符号）によるサイン（署名）という「遊び心」なのだろう。

作品でまず評価できるのは、圧倒的なスケールの躍動感と迫真性である。6種のクジラがじつに快活で奔放に描かれている。しかしそれは現実を描写したものではなく、映像や物語などをとおして作者のイメージとして生き生きとしたリアリティをもったものである。「六鯨」というタイトルには、鯨を畏怖しつつ、それを捕らえ、食べ、神（恵比寿）として崇めるという日本人の敬虔な視点をモチーフにしたことが示されている。それを、計画的なプロセスの型染めによる黒一色、一版の簡潔な表現と、アドリブをとり入れたカラフルなむら染めという対照的な技法を駆使して染め上げた。作品のモチベーションと内容（六鯨）、形態（巨大染色）、技法（一枚型の型染め）が、互いに気脈を通じた整合性によって相乗効果を生み、圧倒的なエネルギーを発散している。

論文では、ひろく世界や歴史における「型」による造形に目を向けた論考が評価できる。そのなかで明らかにしたのは、近世までの手作りの時代や、近代産業界における型染めとはちがった可能性が、芸術表現の型染めに見出されるようになったことである。たとえば、繊細で小さな型を繰り返した近世までの型染めや、多数の型によって複雑な表現をめざした近代産業界の型染めとは異なり、一枚型の魅力に着目して、もっぱら一枚型で表現する作家たちが現れ、型染めが展覧会サイズに合わせて大画面の芸術作品となる状況が生じてきたことである。

芸術表現としての型染めを目指す作者は、小さな型の繰り返しや、多数の版を重ねた型染めとは対照的に、一枚型をよしとして、展覧会のタブローサイズにあわせた大型化の型染めの傾向を踏襲するものではある。しかし、一枚型を突出した大きさにエスカレ

ートさせたことに独自性がある。

型をもちいた表現においては、凸版や凹版よりも孔版のほうが十分な防染剤や色料が施せるので、レベルの高い色価を得ることができる。日本の型染めは、スクリーンプリントやセリグラフの原点となる技法で、重厚で鮮明なメリハリの利いた色面表現ができ、かつ大きいサイズでも製版が可能である。作者はこの利点に着目して、「巨大な一枚型」「型染め」に表現の意義を見だし、実際の作品制作によってそれを最大限に生かし、論文によってその意義と可能性を考察した。作品と論文が相補的に連動しているのもよく、主査、副査そろって総合的に高く評価します。（福本繁樹）

副査の意見

作品の大胆な構図・フラット・波・派手な色・にじみ・しみ・むら・たらしこみなどは、琳派の特色にあてはまるのではと考える。再現可能な型染めと、不可能なむら染めという異なる染色法を効果的に生かし「琳派的なるもの」をあわせもつ、現代の型染め作品として評価する。梅崎さんは実際に鯨を見た事がないと言う。見ようと思えば手段があるはずなのにあえて実行していない。鯨は世界の各地で神として崇められているが、彼女にとっての鯨は、麒麟・龍・鳳凰などと同様の四霊獣に近いものなのかも知れない。だから物語をつくり、豊かに描き、作品にすることができたのだろう。論文に関しては、主張の裏づけや論拠に物足りなさもあるが、近現代の型染めについては先行研究も少なく、努力してここまで研究をすすめ論述できたことを評価します。（小野山和代）

作品は、圧倒的なスケールで抜群の強度を放ちながら、独創的な色彩とデリケートな形態の配置の妙により、イメージ空間の広がりや深みと動きを魅力的に生み出している。類を見ない超巨大一枚型の型染めであるうえ、空間を変容させる現代絵画的特質も発揮する布が、複数枚展示空間内に張られることで、装飾工芸と、大画面の視覚芸術作品やインスタレーションとの、中間領域もしくは交叉の地平を果敢に切り開いている。論文は、調査や裏付けが若干不十分な点が散見され、文章表現にも生硬な部分が残

るが、作品制作と生産的に連結した議論が真摯に展開された論考になっており、研究の過程で得られた知識も十分であることが確認できる。とりわけ、第 3 章の制作過程についての記述は、この「作家」ならではの感性や問題意識、独自の技術を披瀝していて、作品と見事な共鳴を見せる。（瀧本雅志）